

いの流水俳壇

「当季雑詠」

松尾 満津於選

留守の家切り干し大根乾きをり

片岡 包女

〔評〕「俳句」とは人に非らずの句と書くが、人が入らなければ句は語れない。直接に人を出さず、言葉の裏に人を含めるところに句の妙味がある。この句、直接には過疎を云わずに過疎の情景が詠まれている。上五の留守の家は恐らく住人不在の空家であろう。情景をあれこれ詮索するのはさみしいが、それがふる里の実体であり、どうしようもない現実である。むかしからの仕来りにしたがって、切り干し大根が軒に吊され乾いているふる里の姿が、適切な表現を用いて描写された佳句である。

厨窓小鳥来たるを目で合図

植田 紀子

〔評〕台所の窓に小鳥が来ている。特に時刻の限定はないが、朝の情景であろう。傍らに居る誰彼に小鳥が驚かないように目で合図する。女性にふさわしい繊細さが滲み出た巧みな表現である。そのことを頭でこなさず、見たまま、現状のそのままを提供出来たのが、俳句の技量の冴えと

いうものであろう。

初孫を抱きて泣かれし師走かな

小島 良

〔評〕初孫であるから抱いた祖母もまだまだ年は老いていないのである。自分の子を育てた経験と自信がある。何かと多忙な年の瀬、親に代わって、子守りを買って出て、孫に泣かれたのである。幼児と雖も生理的な感覚は芽生えており、作者の気付かない年輪の差、肌の温かさの違いを感じとったであろう。初孫小さくても人の子、年移る師走、人も自然も静止することはない。

老犬の傍に湯たんぽ深ねむり

津田 久美

〔評〕犬は動作が俊敏で、人の心に通じ飼主を絶対に裏切ることのないペットである。老犬ともなれば、その動作に多少の横柄が出る。湯たんぽに人工的な色感が漂って見え、寒気の中でのペットと人との関係が、かかやいて見える。

一筋の光流るる枯野道

岡本とも子

〔評〕「一筋の光」は枯野に沿って流れる小渓である。情景の説明は読者に委ねるべきで、本意ではないが、枯野道に沿って流れる小渓が附近の枯れ一色の中に光となって、靈気を感じたという句感の説明を聞いた。天気の良い日に一度体験してみても……と。

肩の荷を下ろして風邪を引きにけり 竹崎 光子
しぐるるや涅槃の像を拜みけり 松岡きよ子
河豚刺しの透ける皿鉢や伊万里焼 井上 郁子
鍵束に不要の鍵ある年始 間 浩太
老いて知る父の言の葉実南天 川村 博子
漉き槽に冬陽散らして紙を漉く 友草 水月
幾度か夢ちぎらるる寒夜かな 大川 節弥
雪降りて湯上りの声濡しけり 刈谷 志津
繰り言の聞き流されて三ヶ日 川村千因子
もてなしの心にふれて冬遍路 中野 好子
ちよいと来てちよいと飛び立つ寒すずめ 渡辺万利子
初詣参道笑顔目礼す 弘瀬うき子
わが命七草粥であたためて 筒井 眉躬
寒雁や土佐のマホロバ渡りけり 川上こよね
風あれど隈なく晴れて初御空 筒井 文
初春や八紘に透く陽の美し 伊藤 たみ
初電話留学の孫発ちにつけり 川村 愛
冷え込みて終に震となりにつけり 楠目 哲郎
賀状見て無事の便りと安堵する 森岡 照月
初春に何思うなく願いなく 立木ゆう子
初日拝し余生の無事を願いけり 大平 種香
添え書きの一行にある寒さかな 松尾満津於

次 題 「猫柳」「当季雑詠」

締め切り 毎月15日

投句先

吾北教育事務所 上八川甲2010

☎ 867-2133

お礼

いの町6505-64

豊永永子様から

香典返しとして社会福祉基金へ多額のご寄附をいただきました。

福祉課

紙上をもちまして、厚くお礼申し上げます。

今月のこども川柳

ながれ星 さいきんふらん 見たいなあ
下八川小 2年 岡林 怜

たんぽぽや とびたつときは れいを言う

神谷小 3年 坂本 志織

あいさつは 心のとびら 開くカギ

川内小 5年 國澤 優花

手づくりの 料理はいつも おいしいね

伊野小 5年 広瀬 美由

雨上がり 大きなにじが されいだな

神谷小 5年 細木 直輝